

倉元 直樹 (東北大教授)



くらもと・なおき 1961年北海道生まれ。東大大学院博士課程満期退学。博士(教育学)。日本テスト学会理事。専門は教育心理学。

科相は「一人の受験生も受験機会を失うことのないように」と語った。

昨年末、文部科学省から大学入試の新型コロナウイルス対策に関する通知が届いた。オミクロン株感染者の濃厚接触者は当日受験を認めず追試験を勧める、との方針だった。受験生に冷淡で大学にも配慮不足、という印象を受けた。

昨春は入試改革の迷走にコロナ禍が加わり、受験生に大変な思いをさせた。今春も何か起こるのでは、と嫌な予感がした。

案の定、方針はすぐ変更された。首相の指示があったという。年明けには、コロナの影響で大学入学共通テストを受けられない場合は個別試験のみで合否判定を、との要請があった。文

識者論 異例続いた共通テスト

言葉は印象的だが、共通テストのわずか4日前。逆に受験生が動揺するのを懸念した。準備に追われる大学に負荷がかかり、大きな

私も入試業務に向かう間際の不正行為の完全防止は技術的に電車の運休を知り、早朝5時すぎに代替の交通手段を探す羽目に陥った。追い打ちをかけたのがスマートフォンを使った試験

問題流出、想定すべき

入試ミスにつながることを恐れた。

問題の流出。スマホによるカンニングはこれまでもあるが、試験問題の流出は2011年以来の大ごとだ。

これで収まればと願ったが、異例続きの展開の序曲に過ぎなかった。共通テスト初日に東大前で受験生らへの刺傷事件が起き、2日目はトンガ沖の噴火に伴う津波警報の影響が続いた。

問題の流出。スマホによるカンニングはこれまでもあるが、試験問題の流出は2011年以来の大ごとだ。配慮した意見を散見する。前途ある若者が追い込まれたことは心が痛むが、50万人超もの受験生や、翌年以降の受験生も重大な被害を

ほしい。日本の入試制度のセキユリティは盤石とは言えない。問題作成から発表まで、悪意を持った不正行為を完全に防ぐ手だてはない。それでも制度が機能するのは、個々の受験生のフェアプレー精神と関係者の真摯な努力、周囲の理解、受験生への温かいまなざしによる。試験監督の主な業務は不正行為の摘発ではない。試験室内の全受験生が集中して実力を発揮できる、平穏で快適な環境の整備にある。不正行為防止はその一環だ。

互いを信頼して公正公平を保つ精神は入試制度の根幹であり、日本社会の文化的成熟を示す財産だ。金属探知機の導入など、性悪説に基づく制度の再構築には膨大なコストがかかり、技術革新とのいたちごっこに陥る。不正を憎み、互いを尊重する文化こそが不正防止の最大の抑止力だ。とはいえず、組織ぐるみの試験問題流出の危険性は想定するべきだろう。その場合でも罰則が最高で懲役3年の偽計業務妨害罪を適用するしかないとするれば、大いに心配になる。

2月から一般選抜が本格化し、入試シーズンも大詰めだ。コロナ禍の収束が見えない上、今年の共通テストでは数学が極端に難しく、出願先の再検討などを迫られている受験生は多い。せめて今シーズンの終了まで何事も起こらぬよう関係者と力を合わせ、万全を期して臨みたい。本格的な議論はそれからだ。